

<報 告>

日本統治時代の台湾生活誌 ()

柴 公 也

(7) 師範の道

黄 性善 (1916 年生) ; 台南師範学校卒

私の両親は客家系で、農業に従事しておりました。自作農で土地はありましたが、裕福とは言えませんでした。父は、子供の頃、祖父に連れられて広東省の先祖の地に渡り、二年間漢学の勉強をしてきたそうです。台湾に戻ってからも、父は家で漢籍を読んでおりました。客家系は、閩南系に比べて圧倒的に少数ですから、生きていくために伝統的に教育を重視してきたのです。

私が五歳の頃、父に「お前も読んでみる」と言われ、漢籍を学ばされました。後で、近くの書房で勉強しようと思ったのですが、書房の先生に「お前は、もう漢字を読めるから来なくてもよい」と言われ、結局書房には通いませんでした。

1923 年に高雄州の萬巒公学校に入学しましたが、そこは客家系の学校でした。先生方は、校長や教頭を始め大部分が内地人で、台湾人の先生はあまりおりませんでした。

一年生の時の担任は、台北師範学校を出た客家系の男の先生でした。一・二年の時は、客家語を交えて日本語を教えてくださいました。「この花は何の花」、「赤い花」、「名前は鳳仙花」などと反復練習するのです。子供は覚えるのが早いですから、自然に言えるようになりました。二年生になる頃には、日本語が話せるようになっておりました。

三・四年生になると、担任も内地人の先生になり、全て日本語で授業をしていました。印象に残っている先生は、佐賀県出身の女の先生でした。女学校を出て直ぐ台湾に来たのだそうですが、三・四年生だけを教えておりました。当時は、学校の中で客家語を使っても怒られたことはありません。萬巒公学校でも、週に 1 時間は客家語で漢文を勉強していたのです。

六年生になると、日本語を話せない者は日本人ではないと言われるようになりました。客家語を話すと罰金を取られるようになったのです。罰金は 1 銭、あるいは 5 厘でしたが、集まった罰金は学校のために使っていました。

公学校の頃は裸足で、服は台湾服でした。帽子は被らず、草で編んだカバンに教科書を入れて通っておりました。級友たちは皆風呂敷でしたので、羨ましがられました。弁当は持って行かず、昼休みに家に帰ってサツマイモや干しバナナなどを食べておりました。

当時は、輪投げやゴムのボールを手で打ったりして遊んでいました。サッカーはまだ入っておらず、野球は五年生の頃から始めましたが、私は投手を務めていました。相撲も取りましたし、釣りもしましたが、水遊びは危ないということで、親から止められておりました。

私は一年の時から優等生で、先生に可愛がられて6年間級長を務めました。台北師範を出た六年担当の内地人の先生に、「自分は10年以上も先生をやっているが、お前のように賢い子供は初めてだ」と褒められたこともありました。

1930年に公学校を卒業しましたが、中学校は経済的に無理でしたので、官費で勉強できる台南師範学校を受けることにしました。すでに私の従兄が三人、台南師範を出ていたのです。試験科目は、国語、算術、歴史、地理、理科などでしたが、唱歌や図画はありませんでした。ただ、オルガンを弾けるかどうかテストされました。また、懸垂、逆立ち、百メートル走、立ち幅跳びなどの体力検査もありました。合格者に口頭試問がありましたが、幸い5番で合格しました。高雄州からは、私を含めて三人の台湾人が合格しております。

台南師範は、一学年一クラスで、生徒は20~30人でした。内地人は三分の一ぐらいで、台湾人が多数でしたが、客家系は私だけでした。内地人は全額官費ですが、台湾人は半額が官費でした。成績によって等級が付けられていて、官費を支給されない人もおりました。私は官費が半額ですから、毎月4円50銭を自己負担し、残りの4円50銭は官費で納めておりました。大正時代は台湾人にも官費を全額出していたのですが、昭和時代になってからは半額になったのです。

師範学校入学の際には、服装、靴、教科書などの費用は全額自己負担でした。全部で50円ぐらい掛かったと思います。当時は巡査の本給が25円ぐらいでしたから、50円と言えば大金でした。当時は官費を支給される師範学校でも、貧乏人は入学出来なかったのです。

師範学校では、6年間寮で生活しました。一部屋に、一年から六年まで台湾人と内地人が一緒に20人ぐらい入っておりました。床は板張りで、その上に布団を敷いて寝ていました。部屋は寝室で、机や椅子はなく、勉強部屋は階下の自習室でした。夜10時には消灯となるので、勉強する時間は二時間ぐらいでしたが、寝室で勉強することは禁じられておりました。

起床時間は6時で、鐘が合図でした。朝の体操はやりませんでした。朝食は7時で、決められた自分の席で食べていました。御飯にシジミの味噌汁で、お代わりは

二杯まででした。おかずは台湾料理でしたが、内地人も同じで、野菜に魚や肉のおかずを各自取り分けて食べておりました。食事に関しては、別に問題はありませんでした。

風呂は全員一緒に、毎日入っていました。部屋では台湾人と内地人が一緒でしたが、喧嘩などしたことはありません。お互い仲が良かったのですが、ただ一度だけ風呂に入る時、内地人の生徒に「台湾人は後で入れ」と言われたことがありました。

先輩は後輩を監督する権利がありましたので、一年生が入って来ると蚊帳を吊らせるのですが、私も先輩に吊らされました。また、私は些細なことから内地人の下級生を殴ったことがありました。卒業して赴任した学校の校長が、その生徒の父親だったので、息子を殴ったことを話したら、逆に「もっと殴ってやれば良かった」と言われました。

当時、先輩が後輩を殴ることは当たり前のことでした。敬礼を正しくしなかったりした時などは気合を入れると称して、廊下に呼び出して殴っていました。台湾人と内地人との争いではなく、先輩が後輩を指導するために殴っていたのです。

師範学校では、台湾人と内地人との差別はありませんでした。台南師範の先生は、全員内地人でしたが、東京高等師範や広島高等師範などを出た人格的にも尊敬できる立派な先生方でした。実際、先生方が内地人の生徒を鼻屑にするといったような差別は全然ありませんでした。

また、師範学校では台湾語の会話の授業がありました。それは内地人の生徒のための授業でした。公学校の一・二年を担当する場合、台湾語の会話が出来ないと教えるにいくですから、内地人の生徒は台湾語を勉強していたのです。しかし後になると、公学校の一年生にも最初から日本語で授業をするようになり、台湾語の授業はなくなってしまいました。私は客家系ですので、漢文を客家語で習っておりました。週1時間の客家語の授業は6年間ずっとありましたが、特別勉強しなくても成績は常に「優」でした。

ある時、内地人の同級生から「黄君、君の日本語は完璧だな。君は公学校ではなく、小学校の出身だろう」と話し掛けられたことがありました。私が「いや、僕は公学校の出身だよ」と言うと、「嘘だろう。公学校出だったら、そんなに上手く話せるはずはないじゃないか」と疑うので、「出席簿を見れば判るさ」と教えてやると、「あ、本当だ」と驚いておりました。ですから、級友たちは客家系の私に一目置いていたのです。

私は、他にも数学が得意でした。師範学校の時、数学は100点以下の点数はもらったことはありませんでした。台南高等工業学校から非常勤講師として来ていた数学の先生が時間がなくて早めに帰る時などは、先生に頼まれて代わりに数学を教えておりました。ちなみに、私の兄の息子は数学の才に恵まれていて、台湾大学の数学科の教

授を務めていました。

また、軍事教練の授業もありました。台湾人には本来兵役はなかったのですが、内地人の生徒と一緒に銃を手にして訓練に参加しておりました。実際に訓練を受けてみると、肉体的に、また精神的にも鍛えられるので、若者には必要な訓練だと思っておりました。

教育心理、教授法、学校管理などの専門科目も、三年生ぐらいから勉強していました。六年生の時、三学期の二月から二ヶ月間、師範の付属公学校で教習実習を行いました。四年生と六年生の担任になり、前半は、付属公学校の先生について見習いをしておりました。後半は、実際に教壇に立って教えていました。その際、付属公学校の先生は授業を見ているだけでした。

教育実習は、相当に厳しい訓練でした。毎日、授業の教案を準備し、試験問題も作成して採点も行いました。師範の成績の評価は、授業が50点で実習が50点でしたが、私は実習が45点で、優等生で卒業できました。

1936年に師範学校を卒業して、母校の萬巒公学校のすぐ隣の四林公学校に赴任しました。私は三年生を担当しました。初任給は28円でしたが、生活には全然不自由ませんでした。次が水底寮公学校で、建興公学校を経て、1939年に東港公学校（*1941年に東港国民学校と改称）に赴任しました。東港公学校は、一学年が四～六クラスで、一クラス50～70人でした。男子クラスが二、女子クラスが一、男女混合のクラスが一で、男子の方が多かったのです。出席を取る時は、日本語の漢字音で名前を呼んでおりました。

私が東港公学校に赴任した時は、正式の官舎が足りず、倉庫を改造した二部屋の家が宿舎としてあてがわれました。正式の官舎ではなかったので、トイレや風呂は付いていませんでした。内地人の先生は遠くから来るので、官舎に入る決まりになっておりましたが、台湾人の先生は畳の生活に慣れていないし、たいいてい家から通ったり下宿したりしていたので、通常官舎には入らなかったのです。私は四年余り、その倉庫を改造した宿舎で暮らしました。当時は、物価が安定していて、生活には余裕がありました。

1942年の春に、客家系の女性を妻に迎えましたが、客家系の伝統に従って挙式しました。妻は、女学校には行かずに高等科を出ただけでしたが、屏東師範に教員養成速成班（*三ヶ月課程）が設置されましたので、応募して東港から屏東まで毎日通っておりました。修了後は、私と同じ東港国民学校に助教として勤務しました。

東港国民学校では、校長先生に「台湾人の先生は、高学年を担当することは出来ない」と言われました。高学年は進学の指導があるので、慣例として内地人の先生が教えていたのです。私は、「台湾人には教えられないなんて、そんな馬鹿なことがあるものか」と反発しましたが、幸運にも教頭先生は公学校時代の恩師でしたので、恩師

の後押しで台湾人の先生の中で私一人が選ばれて、六年生を担当することになりました。

私は教頭先生の期待に報いるために、上級学校を受験する生徒7~8人を放課後自宅に集めて、毎日二時間程度補習授業を行いました。補習料は、一切取りませんでした。翌年三月、一所懸命教えた甲斐があって、全員が上級学校に合格したのです。特に、一人が内地人にも難関の高雄中学に初めて合格しました。東港では、街始まって以来の快挙だと大評判になりました。父兄からも信頼され、担任になってくれと懇望されるようにもなりました。私は、優良教員として認められたのです。

学校で子供たちを教える時は、単なる知識だけではなく、日本人としての根本的な精神も説いておりました。いわゆる修身教育ですが、私たちは台湾人であるが、同時に立派な日本人になれるよう、一所懸命努力しなければならないということを教えていたのです。

東港国民学校時代、私の給料は50円でしたが、内地人の先生は六割加俸があって80円でした。この差は慣例的に決まっていたので、当たり前と思っておりました。不平や不満は別にありませんでした。海を越えて遠い内地から来たのだから多くもらって当然だと思っていたのです。ただ、台湾生れの内地人も六割加俸をもらっていましたが、それはおかしいと思っておりました。ただし、終戦間際になって台湾人にも六割加俸されるようになりましたが、一回だけもらって終戦になってしまいました。

また、台湾人の先生は教頭とか校長にはなかなかなれませんでした。そのような昇進面での差別はありました。ただ、6年先輩の台湾人の先生が教頭になったということはありましたが、そういうケースはめったにありませんでした。

当時は、民族意識などは別になく、自分のことを支那人ではなく日本人とっておりました。ただ、内地人とは待遇が違っていたので、台湾人は二等国民だと感じておりました。警察官などは、台湾を日本の植民地として見ていたようで、台湾人を抑圧して犯罪者などは人間扱いしませんでした。台湾人は内地人から馬鹿にされていると思うこともありましたが、軽蔑されていると感じたこともありましたが。

ただ、東港国民学校では台湾人の先生の方が多かったのですが、内地人の先生との仲は別に悪くはありませんでした。当時、台北第一高等女学校を出たばかりの若い内地人の女の先生がいたのですが、私と仲が良くて、下校時、校長には挨拶をしないのに私には挨拶をして帰っていたのです。また、内地人の先生と食事に行き帰る段になると、「黄先生は、加俸もらってないから出さなくていいよ」と言って、何時もおごってくれたのです。

また、私は東港国民学校内に設置された一ヶ月の教員速成科の講師を務め、修身と教授法を担当したこともありましたが。他にも、東港郡の青年団の団長も任され、軍事訓練の指導もしておりました。

ある時、郡役所の社会教育課の主事にならないかという話が持ち込まれたことがありました。主事になると公学校の先生よりは待遇が良くなるのですが、ただし、郡役所の役人になるのだから、改姓名して日本名を名乗るという条件付きでした。自分の独断では出来かねるので、実家に帰って家族と相談しておりました。父は、父祖伝来の姓を変えるのには抵抗があったらしく躊躇っていましたが、一応台南師範の田中校長の姓をもらって「田中」に改姓名することでまとまりました。ところが、その間に他の人が主事になってしまい、結局改姓名はせずに終戦まで台湾名の「黄性善」で通しました。

日本時代には、様々な面で差別があって精神的に苦しいこともありましたが、教師としては遣り甲斐がありました。しかし、台湾人が差別を克服しようとする大変な努力が必要で、それが苦しかったのです。ただ、台湾人と内地人は憎しみ合うことはありませんでしたが、終戦後、台湾人と大陸から来た外省人は、お互いに軽蔑して憎しみ合いました。

内地人の先生が日本に引揚げる時、私は涙で見送りました。日本時代と国民党の時代では、道德教育の面で大きな違いがあったのです。

(8) 彰化高女の思い出

楊 双閨 (1921年生) 彰化高女卒

私は、彰化から20キロほど南に位置する溪湖で生まれました。台湾人の学校である溪湖公学校に入学しましたが、校長や教頭を始め、先生方は大部分内地人でした。一学年二クラスで、一クラスは50人でしたが、男女の席は左右に分かれておりました。背の低い人が前に、背の高い人が後ろに座っておりました。四年生からは、男女が別のクラスになりました。

一年の先生は、内地人の男の先生でした。学校に入る前は、日本語は全然解りませんでした。先生は日本語でアイウエオから教えてくれました。ただ、漢文の授業はありませんでした。一年から六年まで内地人の先生に教わりましたが、台湾人の先生は、まだ少なかったのです。先生方は皆優しく、あまり叩いたりなどはしませんでした。悪いことをした場合は、手のひらを叩かれたり、「お辞儀をして謝りなさい」と言われたりしました。

三年の頃までは、台湾語を使っても叱られることはありませんでした。教室の中では日本語でしたが、休み時間で先生のいない時には、五～六年になってもこっそりと台湾語を使っておりました。先生の前では、なるべく日本語を使うようにしていましたが、学校の門を出ると台湾語で話していました。当時、制服はなく台湾服で、風呂敷包みを抱えて裸足で通っておりました。

溪湖公学校を卒業しましたが、常々お祖父さんから「公学校だけでは役に立たないから、彰化高女に行って勉強しなさい」と言われていたので、彰化高女に進学することにしました。

彰化高女は主に台湾人の通う女学校で、一学年二クラスでした。103名入学しましたが、内地人は一クラスに二、三名しかいませんでした。先生方は、裁縫の先生を除いて全員内地人でした。先生方は皆優しくて、叩かれるというようなことはありませんでした。

内地人の生徒とは、喧嘩したり苛めたりすることなしに仲良く付き合っておりました。また、先生や内地人の級友が台湾人の悪口を言ったり、馬鹿にしたりするというようなことも全然ありませんでした。今考えても、人生で最も楽しい時代でした。

学校内では、日本語だけで話しておりました。もし、台湾語を使っているのが先生に見つかったら、教室の前に出て皆に向かって「ごめんなさい」と謝っておりました。ただ、学校から帰る時、友人同士では台湾語で話していました。ちなみに、私は改姓名しませんでしたから、終戦まで台湾名で通しました。

裁縫の授業では、必ず日本の着物を一人一枚作るようになっていましたが、台湾人の梅先生が指導しておりました。着物を作った後、その着物を皆の前で実際に着てみるのです。裁縫の授業はありましたが、料理の授業はなかったように思います。

彰化高女の制服は、セーラー服にスカートで、白い靴下に黒い靴を履いておりました。カバンは、ズックの灰色の肩掛けカバンでした。

彰化高女では、四年間寄宿舎で暮らしました。一部屋に一年から四年まで10人ぐらいつ入り、内地人の生徒も一緒に生活していました。二つのテーブルを合せて、その回りに座って勉強しておりました。9時が就寝の時間でしたが、布団ではなくベッドに寝ていました。女の子ですから、先輩に叩かれるということもなく、皆仲良く過ごしていました。

鐘の合図で食堂に行き、自分の食器で食事をしていました。台湾人の小父さんが大きな釜で炊いた蓬莱米を皆で御碗によそって食べておりました。おかずは、魚一匹と好きな野菜を選んで皿に取り分けていました。味噌汁もありました。時には、お粥やカレーも出ました。御飯は好きなだけ食べることが出来ました。食事の後は、自分の食器を洗って決められた場所に置いていました。

昭和16年に彰化高女を卒業しましたが、仕事には就かず二年ほど家で家事を手伝っておりました。そうこうしているうちに洋裁を習いたくなったので、東京の目黒にあった杉野洋裁学校に入ることにしました。東京では上野に住んでいましたが、上野から渋谷で乗り換え、杉野洋裁学校まで一時間ほど掛けて通学しておりました。内地人の級友とは分け隔てなく付き合っておりましたが、台湾人だからと言って馬鹿にされるようなことはありませんでした。

当時は、自分たち台湾人は内地人とは違うと思っていましたが、だからと言って支那人だとは思っていませんでした。台湾人という意識はあったのですが、それでも終戦の報せを聞かされた時は悲しくて、涙を止め得ませんでした。

その後、台湾に帰りましたが、すでに国民党の天下になっていて、台湾は再度外来政権の統治下に置かれていました。国民党の警察は権力を笠に着て、ただ食い、ゆすりばかり、収賄など、やりたい放題でした。日本の警察は確かに怖かったのですが、規則を守っている人たちに対しては、そう無茶なことはしませんでした。

今更ながらに日本時代が懐かしくなりましたが、その時はもう手遅れで、ついには悲劇の二・二八事件に遭遇し、長い冬の時代を迎えることになったのです。

(9) 澎湖の島で

右田静子(1922年生) 台南第一高女卒；台南師範女子講習科卒

私の父は鹿児島島の谷山の出身で、東京の電気専門学校を卒業しました。卒業後、電気技師として台湾電力に勤務しておりました。母は長崎の出身でした。私はこの両親の下に新竹で生まれましたが、父の仕事の関係で生後間もなく澎湖島の馬公に移りました。澎湖島は火山性の島ですが、山らしい山はなく平坦な島でした。

私は小学校に入る前に、二年ほど馬公小学校の校庭の傍にあった幼稚園に通いました。子供は皆内地人で先生も内地人の女性でした。

小学校は、島で一つだけの内地人の小学校である馬公小学校に入学しました。馬公小学校は、一学年がークラスないしニクラスの小さな学校でした。澎湖島には陸軍と海軍の基地がありましたので、馬公小学校には将校の子弟もおりましたが、大部分役人や商売人の子弟でした。親たちは皆教育熱心で、卒業生は、ほとんど全員が上級学校に進学しておりました。先生方も、皆師範学校を出た優しい先生方で、子供たちを叩いたりすることはほとんどありませんでした。

学校では、晴れている限り校庭に整列して毎日朝礼をしておりました。軽い体操をして、校長先生の訓話がありました。天長節などの式日には、講堂に集まって御真影に奉拝し、校長先生の教育勅語の奉読を聞いておりました。

馬公小学校では、春には運動会、秋には学芸会を開催していましたが、内地の学校と同様に父兄が参観に来て、子供と一緒に弁当を食べておりました。

服装は自由でしたが、髪はオカッパで、皆ズックの靴を履いておりました。カバンはランドセルでした。弁当は、白米に魚や肉、卵や野菜などのおかずを詰めて持って行きました。

子供の頃は家には台湾人のお手伝いさんが通いで来ておりましたし、近所の台湾人の女の子とも仲良く遊んでおりました。ままごとやかくれんぼ、縄跳びやゴム跳びな

どをして遊んでおりましたが、日本語と台湾語のチャンポンで話していたように思います。それで、子供の頃は台湾語が話せたのですが、今ではすっかり忘れてしまいました。

台湾人の生活水準は内地人よりも低かったのですが、馬公の市街地では台湾人の子供も皆靴を履いていました。親たちも教育熱心で、周りの女の子もたいてい公学校に通っておりました。馬公では子供たちだけではなく、大人同士も内地人と台湾人は仲良く過ごしていたのです。

馬公小学校を卒業して、内地人の学校である台南第一高等女学校を受験し、幸い合格しました。試験科目は、国語、算術、修身、地理、歴史、理科などがあったように思います。他に、口頭試問と体力検査もありました。

台南第一高女の校舎はレンガ造りの二階建てで、重厚な感じの建物でした。講堂はもちろん、プールやテニスコート、バレーコートなどもあって、設備には大変恵まれておりました。

一学年ニクラスで、一クラスに二~三人の台湾人の娘さんが在籍していました。皆さん裕福な家庭の娘さんでしたが、成績も優秀で、卒業後東京の女子大や薬学専門学校に進んでいました。台湾人だからと言って苛めたりはしませんでしたし、先生方も差別することなく公平に扱っておりました。実際、私の台湾人の同級生で、いつも首席を争っていた人が卒業式の時、優等生として表彰されています。

先生方も内地の高等師範学校や大学を出た優秀な先生方ばかりでした。また、国語や裁縫、行儀作法などを担当していた女の先生方も東京女子高等師範学校や奈良女子高等師範学校を出た立派な先生方でした。先生方は皆優しい先生方で、熱心に教えてくれました。

制服はセーラー服にスカートでした。靴は革靴でしたが、カバンは手提げカバンでした。髪型は自由でしたが、オカッパの人が大部分でした。上級生になると、後ろで分けて結んだりしている人もおりました。

台南第一高女では、四年間学校の直ぐ傍にあった寮に住んでいました。寮は二階建てで、十畳くらいの部屋に一年生から四年生まで四人が入り、四年生が室長を務めておりました。部屋は畳敷きで、一人ずつ机と押入れがありました。寮では、男子の中学校でのような先輩による制裁とか苛めなどは全くありませんから、皆仲良く過ごしておりました。

朝の起床時間は特に決められておらず、点呼などもなくて7時半頃の朝食に間に合うように食堂に行けば良かったので、朝は余裕がありました。食事は台湾人のコックさんと賄いさんが用意してくれ、食堂で食べておりました。朝食や夕食は日本料理が主で、白米の御飯に魚や肉、卵や野菜などのおかずがふんだんに付いていました。お代わりは何杯でも自由で、お蔭でひもじい思いをしたことはありません。弁当も寮

で作ってくれて教室まで運んでくれました。

放課後は、皆クラブ活動で運動をしていましたので、太り過ぎになるということはありませんでした。風呂は大きい浴槽があって毎日入れました。洗濯などを済ませると、消灯時間まで勉強したり、本を読んだり、レコードを聴いたり、お菓子を摘まみながらお喋りしたりして過ごしておりました。

外出時は、必ず舎監の先生の許可をもらってから出掛けていましたが、買い物をするくらいで、映画を見たりとか食堂に入ったりとかはしませんでした。現代のように自由な環境ではありませんでしたが、それでも人生で最も楽しい時代だったのではないかと思います。

昭和13年に第一高女を卒業して無試験で専攻科に入り、一年間通いました。専攻科は、一クラスが20~30人でした。私は上級学校への進学のための専攻科ではなく、家政関係の専攻科に入りましたので、国語や数学、地理や歴史などの科目は勉強せず、専ら裁縫や料理、お茶やお花を習っておりました。寮は専攻科用の寮が別にあつたので、そちらに移りました。本科の時に比べて外出がだいぶ自由になり、友人たちとよく街に出掛けておりました。

すでに支那事変が始まっていて、男子教員が召集されて行き、教員が不足するようになりました。それを解消するために台南師範に女子講習科が出来ましたので、早速応募しましたが、幸いにも合格することができました。師範学校は第一高女の隣にありましたので、そのまま第一高女の寮から通っておりました。

台南師範の先生方は、皆内地の高等師範や大学を出た立派な先生方でした。師範での費用は、授業料から寮費まで全て官費で賄われていたと思います。一学年40人ぐらいで、台湾の中南部の女学校から来ていましたが、台湾人の生徒も2~3人おりました。

ただ、一年間の速成の課程でしたので、遊ぶ暇もなく勉強一筋の毎日でした。小学校や公学校で学ぶ科目を中心に習いましたが、図画などはなかったように思います。音楽はオルガンが正課でしたので、必死に練習しました。他にも教育心理学や教授法を習ったような気がします。教育実習は、学年の終わりに付属の公学校の三年、四年を対象に、4~5人がグループになって一ヶ月ほど行いました。最初は担任の先生の授業の見学や手伝いが主でしたが、最後には教案を作って二度ほど教壇に立って教えました。

台南師範は本来男子校でしたが、男子との交際は厳禁で、同じ学校でありながら話をする事さえ許されていませんでした。

昭和15年に教員免許を取り、故郷の澎湖島の馬公に帰りました。すでに馬公の役所に連絡が入っていて、台湾人の学校である馬公公学校で三年間教鞭を執ることになりました。給料は6割の外地手当を含めて60円を少し超えるぐらいだったかなと

思います。

馬公公学校は、一学年四クラスで、一クラスは60人ぐらいでしたが、教室はぎゅうぎゅう詰めでした。男女が別のクラスで、最初は四年生の女子組を担当しましたが、別に民族の違いを意識することなく教えておりました。子供たちは本当に良くなつてくれました。

当時、台湾人は確かに内地人とは違うと思っていましたが、それでも外国人とは思わず同じ日本人だと思っておりました。澎湖島は私にとって外国ではなく、間違いなく故里だったので。

馬公公学校では、春に運動会を開催していましたが、学芸会を行った記憶はありません。運動会も小学校とは違って、父兄は参加せず学校内だけの行事だったような気がします。

昭和18年に、熊本の菊池の出身で台南師範の六年先輩の主人と結婚することになりました。主人は熊本の済々黌中学を卒業して台南師範の演習科を出た後、最初は台南の小学校に勤めていました。その後、馬公小学校に転勤になり、私の妹のクラスの担任を務めておりましたが、私が馬公公学校に勤めていた時には澎湖島庁の視学官をしていました。その縁で結ばれたのですが、主人は共働きを望まなかったので、結婚を機に退職して家庭に入りました。

馬公の市街地は水道やガスが整備されていて、すでに近代的な都市生活を送っておりました。台南も都市の基盤が良く整備されていて、引き揚げ後に見た熊本よりも近代的な街でした。学校も台湾の学校の方が校舎も設備も良かったように思います。

終戦後、熊本の菊池の郊外の主人の実家に引き揚げて来ましたが、水道やガスはなく、井戸から釣瓶で水を汲んで来て、竈で薪を焚いておりました。

澎湖島では僅か三年の教員生活でしたが、その間に師弟の契りを結んだ教え子たちとの絆は切れずにあり、今でも澎湖島の特産物を送って来てくれます。体の自由が利かなくなったので、再び澎湖島を訪れることはないでしょうが、命の続く限り教え子たちとの縁を大切にしていきたいと思っております。

(10) 「塞翁が馬」の我が人生

呉 正男 (1927年生) 中野無線付属中学校；水戸航空通信学校

私は昭和2年、台南州の斗六街に生まれました。父は閩南系で、台南師範を出て公学校の訓導をしておりました。その後訓導を辞めて、斗六郡役所の視学官の下で社会教育書記として勤務しておりました。父は模範的な皇民で、家の中でも日本語で話しておりました。母は日本語があまり出来ませんでしたから、私とは台湾語で話していました。母は客家系ですが、客家語を話しているのは聞いたことがありません。

私は内地人の幼稚園に三年間通ってから、内地人の学校である斗六尋常高等小学校に共学生として入学しました。その際、校長の面接試験がありましたが、校長がコップを示して、「これは何ですか」と尋ねました。「コップです」と答えると、今度は「何に使いますか」と聞かれました。私は、色々用途を考え過ぎて答えられなかったという思い出があります。

斗六小学校は、全校生徒二百人足らずの小さな内地人の学校でしたが、設備は整っていてプールがあり、床が檜張りの講堂もありました。一学年は一クラスで、男女共学の30人でしたが、台湾人の男の子が6人入っていました。他の学年では2~3人が普通でしたから、私の学年は台湾人の生徒が多かったのです。先生方は皆優しく、公平に教えてくれました。

クラスの中では民族の違いなく仲良く遊んでおりましたが、一度弁当のおかずにし大根と卵焼きを持っていったら、隣の生徒に「臭い!」と言われたことがありました。ある時、同級生同士で戦争ごっこをして遊んでいましたが、負傷した真似をしたら早速クラスの女の子に介抱してもらい、非常に気分が良かったことを覚えています。ただ、斗六では内地人は官舎に固まって住んでいましたので、学校以外では内地人の子供と遊ぶことはありませんでした。

小学校時代には、「国語の家(*日本語常用家庭)」で「大山正男」と改姓名をし、さらに剣道少年かつ軍国少年として育ちました。ですから、子どもの頃はほとんど日本語の生活で、台湾語は、終戦後法政大学を卒業して、横浜華銀に入行してから覚えたようなものでした。

小学校時代は、苛められたり差別されたりしたという印象は残っていません。ただ、内地人は台湾人に対して優越感を持っているように感じていたことも確かです。実際、六年生の時、先生が内地人の生徒を自宅に集めて補習していましたが、自分は呼ばれませんでしたので、その際、「自分は差別されているんだなあ」と思ったこともありました。また、中学校の受験においても内地人の方が有利だったことは明らかでした。

昭和15年の春、嘉義中学を受験しましたが、あえなく落ちてしまいました。6人の台湾人共学生のうち、一人だけが合格しました。他の一人は内地へ行き、残りの4人は高等科一年に進学しました。当時の高等科は生徒が少なく、一年と二年が同じ複式のクラスで、一年には7~8名、二年には2~3名で、女生徒は合わせて3名ぐらいしかいませんでした。

翌年の春の受験では3人が嘉義中学に合格しましたが、私一人だけが不合格となってしまいました。それで、父に「京都に親友がいるから内地へ行け」と言われ、内地へ単身留学することになりました。当時の台湾では、役人になっても出世の道は閉ざされていたので、父の意向を受けて医者を目指すことにしました。

昭和16年の4月初旬、基隆から内台航路に乗船しましたが、その際、渡航証明書

とか台湾人への取調べなどはなく、内地人と同様に乗下船しておりました。神戸港に上陸して関西弁を聞きましたが、「内地の人は優しいな」と実感しました。実際、内地での生活で、差別されたり馬鹿にされたりしたというような記憶は全然ありません。そのため、台湾人意識が育たず、内地人とは違うということは分かっていますが、自分が日本人であることを疑ったことはありませんでした。

4月では、どこの中学も受験は出来ず、結局、東京の中野に新設された私立の中野無線付属中学に入学しました。受験競争の激しかった台湾で劣等生だった私は、他中学の落第生が集まった東京の私立中学では優等生に変身しておりました。

東京では寮に入らず、台湾人の入っていた下宿に世話になりました。小母さんは50代ぐらいでしたが、とても親切で情が厚く、実の母親のように良く面倒を見てくれました。私が入隊した後でも面会に来てくれたのです。父からは毎月50円送ってもらっていましたので、生活には余裕がありました。

中学一年の時に大東亜戦争が勃発し、戦局の悪化に従って憂国の軍国少年へと変身していた私は、中学三年の夏頃に、父に志願入隊希望を告げて許諾を求める手紙を出しましたが、返答はありませんでした。それで私は、「志願入隊する。生活費の送金を止めてもよい。新聞配達の苦学生になる」という内容の手紙を出しました。すると、父からすぐ「オマエノシンネンドオリヤレ」という電報が来ました。当時の内地人の中学生にとっては、志願入隊は普通のことでした。今思うと不思議なことですが、私の周りの台湾人の友人たちの誰からも「志願入隊なんか止める」という忠告を受けたことはありませんでした。

中学三年の終了時に、陸軍特別幹部候補生を志願し、昭和19年4月に受験して合格し、水戸航空通信学校長岡教育隊に入隊しました。台湾人には兵役の義務はありませんでしたが、何の疑いもなく自分は日本人だと信じていましたから、日本を守るために志願したのです。おそらく、内地留学中の台湾人の少年で、志願して軍隊に行ったのは、私一人だけではないかと思います。ただ、入隊時は歓呼の声もなく、友人一人に見送られて中野駅を出発した寂しさは、今でも忘れられません。

入隊した同期生2400人中より選抜され、私は機上通信士中隊(*200人)に配属されました。台湾出身は私一人で、朝鮮出身は二人でしたが、そのうちの一人は飛行第66戦隊に転属して沖縄戦で散華しました。私たちは同期生の羨望の的でしたが、それが消耗品を意味することも覚悟しておりました。

昭和19年の12月下旬、私は茨城県西筑波飛行場の滑空飛行第一戦隊に転属しました。フィリピンに出撃直前であったので、髪や爪を切って私物全部を下宿先に送り、夏服に着替えて搭乗機も指定されました。この戦隊は、「空の神兵」で有名な挺身空挺隊でした。挺身滑空歩兵の約20名を乗せた大型滑空機(*グライダー)を、97式重爆撃機が120メートルのロープで曳航し、敵飛行場上空で切り離して強行着陸さ

せる戦隊でした。私は、搭乗員 5 名の 97 重爆撃機の通信士でした。

滑空機操縦士の中には、台北高校元配属将校の長男岩佐陽太郎少尉、鄭成功の実弟次郎左衛門の後裔である鄭喜一少尉がいて、満 17 歳の兵長の私は特に可愛がられました。

フィリピン戦向けに西筑波飛行場を先発した滑空歩兵を乗せた空母「雲龍」が 12 月 19 日、上海沖で轟沈したので戦隊の出撃は中止となりました。全滅した滑空歩兵の再編や訓練は米軍の空襲が続くため、西筑波飛行場では不可能となりました。戦隊は、5 月初旬朝鮮半島の日本海に面した宣徳飛行場に移動しました。

沖縄戦参入を目指し、主として滑空機曳航の夜間離着陸の猛訓練が続きましたが、何度か事故も発生しました。7 月頃、私は、特攻要員操縦士数名を米子飛行場への空輸隊に搭乗させ、帰航時に満洲方面に赴任する高級将校を便乗させて、大変感謝されたことがありました。結果的には、将校らはソ連軍の侵攻により、苦難の日々を過ごすことになったのですが。

7 月中旬頃、搭乗員全員に対して、飛行場内の神社の境内で、特攻要員参加の意識調査がありました。「志望」、「熱望」、「熱烈望」の何れかに丸印を付ける生死決断の厳粛な場面でした。私は「熱烈望」に丸印を付けたことを鮮明に覚えています。当時、「人生 50 年、軍人は半分、飛行機乗りは更に二割引き」と言われていた時代です。戦局の悪化や特攻隊の報道も耳にしており、満 17 歳の私は、いずれ死の順番が来ることを漠然と覚悟しておりました。

結局、私は要員には洩れましたが、戦隊主力の 8 機と滑空機は沖縄戦参入のため、8 月 6 日、東京西郊の福生飛行場へと出撃しました。私は、全機帰還はあり得ないと見送り、生き延びたと思いました。

一方、我が戦隊は実戦には投入されず、「幻のグライダー部隊」となってしまいました。現在でも旧西筑波飛行場の営門付近に、陸軍滑空飛行第一戦隊（*グライダー部隊）発祥の地の記念碑が残っています。

8 月 15 日の玉音放送は、宣徳飛行場での移動準備中に聞きましたが、雑音で理解できず、対ソ戦への鼓舞と思いました。残留隊員は移動命令に従い、朝鮮西北部の新安州飛行場へ 8 月 16 日に出発しましたが、敗戦を察知して平壤飛行場に入り、そこで新たな命令を待つことにしました。敗戦の混乱を経験したことのない指揮官以下は、25 日まで飛行場に面した大同江でのんびり遊泳したりしているうちに南鮮への脱出機会を逃がしてしまいました。

戦隊の解散後、私たち三人組は民間人に変装して 38 度線を越えるべく、約一週間山中を徘徊しましたが、結局抑留の身となってしまいました。興南港を出てソ連領に入り、シベリヤ鉄道を貨車に乗って西へ向かう 23 日間は不安と苦難の旅（*トイレなし）でした。到着したのは、夏は 40 度を越え、冬は零下 25 度にまで下がる、中央

アジアの半砂漠地帯のカザフスタン北部の収容所でした。約二年間の雑多な重労働、空腹、マラリヤなど、思い出すのも嫌な期間で、今でもソ連が憎くて仕方ありません。

昭和 22 年の 7 月、舞鶴港に復員した時の体重は約 40 キロの瘠せさらばえた姿になっていましたが、幸いにも生きて日本の土を踏むことが出来ました。

今、私の来し方を振り返ると、真に幸運な一生だと神仏に感謝しております。私の人生には数多くの分岐点があり、その都度、偶然にも幸運の選択肢が得られました。以下に、その数々を箇条書きにしてみると、以下のように思われます。

- (一) 台湾で中学受験に二回失敗したので内地に留学できたこと。
- (二) 志願入隊で東京大空襲に遭わなかったこと。
- (三) 転属先の戦隊がフィリピン向けに出撃する直前に中止となったこと。
- (四) ソ連に抑留されたので戦後すぐ帰台できず、そのため二・二八事件や白色テロに遭遇しなかったこと。
- (五) 抑留時の自主申告で本籍地を茨城県としていたので日本人として復員でき、中国共産党の八路軍に引き渡されなかったこと。
- (六) 復員後、新制高校・大学と進学して、すでに新中国建設の希望に燃えて大陸に渡って行った友人たちより遅く昭和 29 年に卒業したが、その間に中国の事情が判り、共産党政権下の大陸に渡るの見合わせたこと。

数多くの受難者の体験記に接し、多くの方々が受けた苛酷な仕打ちや非業の運命に比較すると、私が如何に幸運だったかと痛切に感じております。神仏の加護によって得られた幸運に感謝すべく、横浜中華街の関帝廟で空に向かって「天公 (* 天を主宰する神)」に合掌しております。

(11) 商業学校の頃

菅原 皓 (1929 年生) 台中商業 ; 台南商業 ; 海軍飛行予科練習生

私の父は、台湾総督府の鉄道局に勤めておりました。台中の家は鉄道官舎で、周りは皆内地人でした。小学校の頃までは内地人の中で育ったので、台湾人との付き合いはほとんどありませんでした。

当時、台湾人の公学校の生徒は校門までは裸足でしたが、校門を潜る前に手にしていた靴を履いて通っておりました。ただ、中学生になると台湾人も皆靴を履いていました。

ただ、大人は靴ではなく、古タイヤを切って作ったぞうりを履いていたように思い

ます。田舎では、子供も大人も裸足でした。実際、予科練にいた頃、私の知人が結婚する際に、私の軍靴を貸してあげた思い出があります。

私は台中の小学校を卒業して、内地人と台湾人の共学の学校である台中商業に入学しました。先生方は、二、三人の台湾人の先生を除いて、全員内地人の先生でした。

一クラス 50 人のうち内地人が三分二ぐらいを占めておりました。内地人の同級生は公務員や商売人の息子でしたが、台湾人の同級生は医者や弁護士などの裕福な家庭の息子でした。台湾人の生徒は育ちが良いので、同級生同士は喧嘩をすることはほとんどなく、学校の中では仲良く過ごしておりました。

台湾人の同級生は厳しい競争を勝ち抜いてきたので、皆優秀な人たちでした。特に、英語と数学は台湾人の適性に合うのか、内地人の生徒よりは良く出来ていました。すでに皇民化運動の時代ですから、学校内では台湾人の級友たちも皆日本語で話していました。

当時、台湾人は公学校を終えると直ぐ働く場合が普通で、中等学校や高等科に進む者はあまりありませんでした。逆に内地人は、ほとんどが中等学校に進学しておりました。

台中商業は、二年生の一学期まで通いましたが、父が台南に転勤になりましたので、台南商業に転校しました。台南商業も、やはり内地人が三分の二ぐらいを占めておりました。同級生同士は、馬鹿にしたり苛めたりすることはありませんでした。先生方も、台湾人の生徒を差別したりすることはなく平等に教えてくれました。

ただ、他校の生徒とは喧嘩をしたり、上級生には態度が悪いと言われて、内地人とか台湾人とかの区別なく、よく気合を入られておりました。その場合、五年生の柔道部の主将が内地人であれば、その主将から圧力が掛かるので、内地人の下級生は厳しい制裁を免れることが出来ました。逆の場合は、台湾人の下級生が恩恵を受けました。

私も上級生になると、態度の悪い後輩を見付け、内地人とか台湾人とかの区別なく気合を入れておりました。この悪習は根絶されることなく、どこの中学でも終戦の時まで申し送りにされていたようです。

私は、学校では内地人の級友よりは台湾人の級友と仲良くしておりましたが、台湾人の級友からは表立った反感などは感じられませんでした。台湾人の大人同士が街の中で喧嘩している姿はよく見たことがありますが、内地人と台湾人の大人が喧嘩している姿は一度も見たことがありませんでした。

これは、内地人と台湾人の間にトラブルがあると、たとえ内地人に非があっても台湾人の方を罰していましたから、台湾人の方で内地人との喧嘩を避けていたのでしょう。

私も疎開していた時、七面鳥がサトウキビ畑をうろついていたので、捕まえて食べ

てしまったことがありました。飼い主の台湾人は早速警察に訴えたのですが、放し飼いにしていたのが悪いということになって、結局無罪放免にしてもらったことがあります。

それで、台湾人には不満が溜まっていたのでしょう。終戦後、厳しかった教練の教官が台湾人の生徒からの報復を恐れて雲隠れしたり、実際に生徒たちに殴られた先生がいたと言うことを、予科練から帰って来て聞いたことがあります。

正直言って、当時は一部の金持ちを除いて台湾人の生活水準が低かったので、台湾人を一段低く見ておりました。ただ、だからと言って面と向かって馬鹿にすると言うようなことはありませんでしたが、台湾人のカップライやなんかには「このチャンコ口、待て！」などと言って追っかけ回しておりました。

当時、行商人や雑貨屋や泥棒は全て台湾人でしたが、内地に引き揚げて来て内地人が行商や泥棒をするのを見聞きして、驚いたことがあります。

台湾は、確かに内地人にとっては豊かな島でしたが、支配されていた台湾人にとっては必ずしも豊かな島とは言えなかったのでしょうか。ただ、自然に恵まれていましたので、いくら貧しくても飢え死にするというようなことはありませんでした。

私は四年の時、予科練を志願し、合格して高雄の海軍基地に配属されました。予科練では、毎日のように鉄拳や海軍精神注入棒で殴られておりました。軍隊では学校のように手加減しませんから、だいが応えました。

中隊長は20歳ぐらいで班長は18歳でしたが、班長は髭をボウボウ生やして貫禄があり、実際の歳よりずっと老けて見えました。

高雄で半年間基礎訓練を受けた後、澎湖島の馬公の海軍基地に移り、半年間実地訓練を受けました。毎日、朝から殴られながら訓練を受けるだけでしたから、他には何も出来ず、馬公の街に出掛けることもありませんでした。

また、朝鮮人の軍隊も来ておりましたが、日本名を名乗っており、片言の日本語を喋っていました。死を目前にした仲間でしたから朝鮮人の軍隊とも親しく付き合っておりました。

馬公には、海岸に洞窟を掘って造った秘密の特攻基地がありました。「震洋」という長さ5メートル、幅1.2メートルで、自動車用エンジンを使用した一人乗りのボートに250キログラム爆弾を積んで、夜敵艦に体当たりするというものです。幸い、実戦に参加する前に終戦になり、今日まで命を永らえることが出来ました。今は不運にして若い命を散らした志願兵たちの冥福を祈るだけです。

続